

キリスト教系聖職者のセラピー

木村欣一郎 (大分)

要旨

キーワード :

はじめに

野田俊作氏が『アドレリアン』通巻 51 号に「アドレリアン・セラピーとは何か？」で 4 つのグランドデザインをまとめられている^[1]。その中で、グランドデザイン 4 (GD#4) はいわゆるスピリチュアル・セラピーのことである。

氏がはじめてスピリチュアル・セラピーをおこなわれたのは、忘れもしない 2003 年 9 月、東京アドラーギルド主催のヒプノドラマであった。これについて筆者の参加感想録が『アドレリアン』通巻 43 号に掲載されている^[2]。このとき、「スピリチュアリティというのは科学、経済、法律などの枠組み、つまり頭で物語を解釈してゆきづまっている現状を乗り越え、スピリチュアリティという枠組み、つまり、〈頭と体と心〉の〈全体〉で解釈すると、意外な解決策が見つかる」という説明がなされていた。この詳しい説明は『アドレリアン』通巻 50 号の野田氏の「真心を目覚めさせる」という論文に掲載されている^[3]。氏は、まとめの中で、「スピリチュアルセラピーは、絶対的全体論の枠組みの中で、代替案をいっさい与えないで、これまでの解決行動ないし価値判断を断念させる方法である」と書かれている。

筆者はヒプノドラマの合宿に参加して、それまでの自分の信仰のあり方や、人生上の重要な出来事についての疑問が氷解した。1999 年に脳出血をおこし、いまでも右手の知覚障害のみならず、その後の退行性萎縮のため、小さい字は書けず、筆圧も減少しながらも、運動マヒはなかったので、なんとか疼痛治療のために鍼を打ったり、注射をしたりすることは可能である。これもすべて神様のはからいと思っている。またそれまでの自分の食欲さや傲慢さを反省し、神様の夢の中のお告げのとおり、日常診療のみに専念し、その他の活動を停止したので、2006 年の脳の再出血も乗り越えてきた。筆者は「病気も神様からのプレゼント」と確信し、み恵みに感謝しながら生活している。

まえおきが長くなったが、2003 年以後、2 人のキリスト教系聖職者のセラピーを経験した。これらのケースについては、GD#4 の亜系ではないかというのが筆者の結論である。この際、筆者の経験をふまえ、クライアントの情報収集がおわったら、何の代替案も提示せず、すぐに、「このような状況も神様からのプレゼントではないか？」という旨の解釈投与をおこなった。聖職者の場合、クライアントの過去の情報収集はしないというのが礼儀作法である。このような状況でも、もちろん、ライフスタイル診断はできるし、実際行っているのであるが、あえて、それはここでは書かず、以下症例を提示する。なお、プライバシー保護のため、若干の脚色をしているこ

とをお断りしておく。もう既に早くセラピーは終結したのであるが、筆者の個人的事情のため報告が遅れてしまった。

症例 1 クライアント A、40歳すぎ、男性

○情報収集

約1年前より、上司の命令(聖職者の場合、特別の理由のないかぎり拒否できない)で、会社でたとえば、社長にあたる人の秘書のような仕事になった。ところが、それまでの小さな教会での信徒相手の比較的のんびりした仕事ではなく、新しい仕事は多忙であるうえに、この仕事についてから、上司と毎日食事も寝泊りも同じ会館で生活している。上司は最高責任者に着任したのが2年前で、クライアントより年齢は2歳ほど年上である。出会ったときから、この上司とはいろいろなことで、方針も違うし、上司は権力的で、命令指示ばかりで、最近この人とは一緒に仕事できないと思うようになった。

最近の出来事でクライアントが我慢ならなかったのは、その上司が「コーヒーをいれてくれ」というので、いれたら、文句をたらたら言い、「こんなまずいコーヒーを飲んだのは初めてだ」といったかと思うと、突然「天国とはどんなところだ。地獄はどんなところだ」質問し、まるで、子供扱いである。ここ最近では、側に彼が近づいてくるだけで身震いがする。電話の取次ぎをしたら「そんな応答の仕方はだめだ」とうるさい。いつも身体がビリビリしている。気分も悪く、不眠状態である。どうしてよいかわからない。

以上、不安状態が著しい状態であった。

○解釈投与

筆者 「ところで、このような状態で、苦しんでおられるのは、何か神様からのメッセージというか、神様からのプレゼントではないかと思うのですが、いかが思われますか？」

情報収集が終わるとすぐにこのように質問し、筆者自身の体験を手短かに説明した。しばらくクライアントは沈黙していた。

CL 「実は、そのことについて、当初より、考え折ってきました。私たちの場合、上司にいつさい、反対はできませんので、はじめは、今回の職場変更についても、神様からの命令と考え、すべて、従ってきました。しかし、最近このような精神状態になり、どうしてよいかわからなくなってきました。神様は必要以上の苦しみをお与えにならないという教えがありますね。どうしてこのような理不尽な苦しみを神様はお与えになれるのか？ しかし、あらためて、あなたに問かけられると、私にとっては、神様がこのような職場を与えてくださって、自分自身で生きる道を選択するようにさせたのではないかと思います。精神状態のみならず、身体症状も病的状態のまま、まだ我慢しなければならないのか、という疑問が生じてきました。自分が、もうなんらかの意思表示をしてもよいのではないかと思うようになったのです」

筆者 「それで、今後どうされるのでしょうか？」

CL 「いまの職場や上司とは方針が違うし、だいぶん忍耐してきた結果、現在のところを辞めようと思います。そして、以前のような、小さなところで、信徒と触れ合う生活の方が自分に

は合っているというあなたの問いかけで、今あらためて納得できました。上司も私がいなくてもよいと思っておられるのかもしれませんが。彼もまだ重要なセクションの責任者となって日が浅く、何か気負っておられて、張り切り過ぎのようにも思われます。彼と離れて彼が職務をまっとうできるように、彼のために祈ります。何かこれで、ふっきれた感じです。ちょうど今から希望を出しておけば、次の転任先も見つかると思います」

○態度の変化

約1時間ほどの面談であったが、クライアントも当初と異なり、明るい表情となり、全体の印象が生き生きしてきた様子であった。

○その後

風の便りによると、3ヶ月後に別のところに転任し、元気に活躍されているとのことであった。

症例2 クライアントB、60歳前後、男性

○情報収集

X年6月頃より、ある問題をきっかけに、全身疲労感、悲哀、怒り、自責などが生じ、近しい人には「一人で遠いところに行きたい。自動車事故で死ねば手っ取り早い」などと漏らすような希死念慮があり、他の精神科医が紹介してきた。若い頃より、独立伝道(テントをかかえて、見知らぬ土地に行き、単身で、伝道活動をおこなう)などをおこない、40歳ころより、信徒集団有志で独立の教会を建て、その責任者として現在まで伝道活動を行ってきた。信徒総数は400人くらいだそうで、教会の役員は以前から一緒に苦労した人たちである。なんとか順調に経過していたのであるが、ある個人的問題をきっかけに、上記の症状が出現してきた。疲労困憊し、耳鳴りや身体が震えたり、涙が自然に出てくる。夜ほとんど眠れない日々がここ1ヶ月ぐらい続く、との訴えがあり、うつ病と診断した。

○経過(1)

約3ヶ月間は抗うつ剤の投与と、しばらく仕事を休むように医師として提案した。クライアントは、休むことに当初抵抗があったが、役員会に相談した結果、OKが出たので、仕方なく同意した。病状の経過から判断し、休養がもっとも大切と説得し、1年間休むように筆者から彼に同意をとりつけた。3ヶ月位経過して、発症のきっかけとなった問題も解決し、感情的にならずに対話できそうになったので、セラピーを開始した。

○解釈投与

筆者 「ところで、このような病気になられたのは神様からのプレゼントと思われませんが、いかがでしょうか？」

このように質問し、筆者の体験を簡単に話した。この質問にクライアントは、驚いた表情をした。そして次のような質問をし、以下のような会話となった。

CL 「信仰が強ければ、病気などしないのではないかと思います」

筆者 「では、この間の出来事はどのように考えられますか？」

CL 「信仰が弱いためと思います」

筆者 「では、病気はすべて信仰が弱いから生じるとお考えでしょうか？」

CL 沈黙してしまう。

筆者 「これはひとつの考えです。私の経験からそのように判断したのですから。私の方が間違っているかもしれません。次回まで、考えてみていただけますか？」

経過(2)

2週間後、面談を行う。クライアントは次のように語った

CL 「その後、神様に祈ってきました。新約聖書の中で、イエスがある病が治らない理由を『信仰がたりないからだ』と言われている箇所があります。また、他の箇所では、『すべて重荷を負うて苦労している者は私のところにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう』とあります。私は責任者ですから、これまで多くの信者をなぐさめてきました。按手をして病気が癒されたことも経験しています。しかし、自分がこのような病気にかかることは全く思いもよらないことでした。当初あなたからうつ病といわれたとき、正直言って驚きました。私が何故このような病気にかかるのかといわばショックだったのです。役員にも病気を告げるのに勇気がいりました。しかし、役員会で、『あなたはなんでも自分でやらないと了解しない。これまで、心身を酷使され続けておられる。長年の間、安息日もないくらい、働き続けておられる。普通の人なら、これまで、何か病気にかかっていると思う。だから、今はこれまで、休んでいなかった安息日を一度にたくさんとって、休養しなさい。ということではないかと思う』と言われ、そのときは納得しなかったものの、あなたからの問いかけと、役員から言われたことで、気づきました。わたしは今まで、自分がしなければ、しなければと思い続けてきました。しかし、神様に祈っていると、自分が責任者だからと、気負いすぎていることに気がつきました。教会運営も自分がいなければうまくいかないと思っていたのです。若い頃より走り続けてきました。自分中心でいることに気づきました。いわば、傲慢だったのです。悪くいえば自分でも気がつかないうちに、権力欲にかられていたことに気づきました。だから、神様は私に1年間という長い期間休みなさいという恩寵を与えてくれたことに気づきました。やはりこれは、神様が『私に休んで、これまでの自分の責任者としての行動を反省しなさい』というメッセージではないかと思うようになりました。私が休んでも、なんとか役員会が教会運営を行っています。私から見ると不十分なところもありますが、なんとか皆が協力しあって運営しています」

以上のことを落ち着いて話されるようになった。それまでは、あせりのような状態も見られたが、何かクライアントに変化が起こったような態度がみられた。

筆者 「それで、今後どのようにされるのでしょうか？」

CL 「私のもっとも大切な仕事は、日曜日の説教です。これまでは、準備するのに、いろんな本なども読んで、ずいぶん時間をかけました。そのやり方は止めて、聖書のその箇所をよく黙

想して、どのようなメッセージが中心になっているのかを神様に祈りながら、説教しようと思います。また、教会運営は当分役員会にこれまでのように委託して、私はこの説教だけに集中しようと思っています」

本当に謙虚にたんたんと話されるので、当初とずいぶん変わったのが確認された。休暇をとって6ヶ月、うつ状態も改善され、少量の睡眠剤だけ服用するという状態まで改善した。

経過(3)

年が明ける元旦の式より、説教をクライアントは開始した。一般の信者さんからはこれまでとちがって、わかりやすく、心に染みとおるような説教だと言われた。この状態を約3ヶ月間続け、次第に、教会行事に復帰し、この間、旅行したり、他の教会を訪問したりした。治療開始から1年後に全面的に復帰した。

筆者 「病気になる前と現在どのように変化しましたか？」

CL 「当初、私がうつ病になるとは思ってもみませんでした。それまで、若い頃から、自分の方針のまま、馬車馬のように駆け抜けてきた人生でした。いつの間にか、活動が自己中心となり、他者より優越しているというか、自分がいなければ、何事もできないというふうに、傲慢になっていたと思います。最初あなたから、いきなり、『病気も神様からのプレゼントではないか?』と問いかけられたとき、正直言って、『何を言うか?』とショックでした。そのようなことは考えてもみなかったことでした。しかも、1年間も休養せよと言われ、そんなに長期間?と思いました。しかし、結果的には、今回のうつ病によって、それまでの私の宣教活動の総括をしなければならなくなり、神様に祈っているうちに、『自分がいなければ、教会運営はできないと思っている。何でも自分中心な活動であった』ということに気づかされました。それで、自分がどうしてもしなければならぬ説教を生活の中心におき、その他のことは、役員会に任せました。任せた結果、当初は私から見ると不完全と思われることも、次第にそれよいいのだ、と思うようになり、神様は私の傲慢さを打ち砕くために、うつ病にさせ、考え、反省する期間を与えてくれたものだということが次第にわかってきました。大切な1年間だったと思います。周囲の信者さんたちからは、ずいぶん説教がかわり、感動することが多く、感謝している、と言われていています。役員の人たちも成長したように思われます」

以上のように、たんたんと述べられ、筆者自身もクライアントの態度や風格がより一層、霊的に清らかになったという印象を受けた。

考察

野田氏はスピリチュアルセラピーについて、論文「真心を目覚めさせる」の中で、仏教的立場とグレゴリー・ベイトソンの学習Ⅲを引用して詳しく説明されている^[3]。

スピリチュアル・セラピーの場合は、フレームワークを設定することが必要である。これまでに獲得した学習を脱学習するのであるから、「世間の常識」をすべて括弧に入れておく必要があるからである。さらに、その中で、パラドキシカルなルールを設定する。すなわち、既成の技術

や知識はすべて無効であると宣言した上で、しかも、新しい知識は教えない。(中略)このような状況下で、はじめて学習Ⅲがおりうる。(中略)より具体的に言うと、「マインドの言うことはすべて嘘であり、ハートが言うことはそれとは違っているが、あなたはまだそれを知らない」というルールを設定する。(中略)まるで禅の公案のように難問である。(中略)これは一種の苦行になりうるが、いくらかでも容易にするため、合宿形式の濃厚な学習グループを用いることが多い。そこでは儀式的ないし祭礼的な、きわめて、仮想性の高いフレームワークを作り出す。(中略)あれは合宿だから可能なのであって、普通の外来個人療法や通いの学習グループでは、よほど条件が整はないと可能だと思わない。学習Ⅲをおこすためには、ある種の「異様な雰囲気」が必要なのである。

筆者の症例では、情報収集してから、いきなり「病気は神様からのプレゼント」という解釈投与を行った。これは、筆者も含めて、クライアントがキリスト教信者でしかも聖職者という、特殊な共通の立場があり、いきなり解釈投与を行って、いわば特殊なフレームワークをつくることが可能であると確信したからである。野田氏も「《全体》の部分には、もしクライアントが特定の宗教を持っているのであれば、その神格を代入してもよい。スピリチュアルセラピーは、いかなる宗教とも関係ないが、いかなる宗教の文脈の中でも使用可能である」という解説をしている^[3]。筆者もこのとき、冒頭に書いたように2003年9月の合宿参加の時の体験から、この解釈投与がスピリチュアルセラピーになり得るとすでに考えていたので、機会があれば試してみようと思っていたのである。もちろんアドラー心理学セラピーである以上、野田氏のいう^[3]「絶対的全体論にもとづくメタファー」ということを自覚していたことは言うまでもないことである。

症例1も症例2もクライアントの抱える問題は、いわば仕事のタスクである。したがって、野田氏の分類による従来の代替案の提示によるグランドデザイン2 (GD#2)のやり方でも可能であったかもしれないが、GD#2の方法で、スピリチュアルな目覚めがあったかどうかは疑問である。あえて、このようないわばクライアントの意表をつくような方法がとれたのも、筆者が既に合宿で体験済みであったからである。

症例1のA氏の場合は、約1年間悩み、精神の格闘をし、どん底まで落ち込んで、祈り続けていた。当初、彼はこの出来事を、神様からの恵みというより、試練と受け止めていたようである。「どうしてよいか分らない」というせっぱつまった心理状況であった。従って、筆者の「ところで、このような状態で、苦しんでおられるのは、何か神様からのメッセージというか、神様からのプレゼントではないかと思うのですが、いかが思われますか？」という解釈投与に対しても、すぐに、納得し、約1時間の面談でA氏は「私にとっては、神様がこのような職場を与えてくださって、自分自身で生きる道を選択するようにさせたのではないかと思います」というように＜真心を目覚めさせた＞のではないかと推測している。本人自身の聖職者としての生き方を管理職的な方向でなく、小さな教会で、直接信徒と生きる方向を選ぶことを確信すると、神経症的症状はすぐに消失した。まさに劇的な変化がみられた。

症例2のB氏の場合は、当初うつ病で自殺念慮もあり、入院治療を勧めたが、断られたので、かなり濃厚な薬物療法と、周囲の人たちの厳重な見守りの中で、約3ヶ月という期間の後、冷静な状態で対話できる状況まで回復を待ち、セラピーを開始した。1年間の休養も当初は、ショックであったようである。「うつ病」を本人が受け入れるのに、時間を要した。「自分がうつ病にかかるのは恥だ」という気持ちが強かった。

従って、「ところで、このような病気になられたのは神様からのプレゼントと思われませんが、いかがでしょうか？」という解釈投与にたいして、当初は否定した。これもショックであったようである。しかし、症例報告で書いたように、やがて解釈投与を受け入れざるを得ない状況にな

った。一切の代替案を出さず、筆者が解釈投与のみで、問いかけたので、教会の責任者もうつ病になるのだということを素直に認め出した。それから、心理状況にも態度にも変化がみられた。そのきっかけは、筆者の解釈投与を受け入れざるを得なくなったということであろうか？ それは、<ある種の異様な状況の雰囲気>を作ったとも言えるのではないかと筆者は判断している。B氏が解釈投与を受け入れてから、それまでの生き方を反省して、経過(3)で書いたような変化が見られ、結果的にB氏も、「神様は私の傲慢さを打ち砕くために、うつ病にさせ、考え、反省する期間を与えてくれたものだということが次第にわかってきました」という洞察があつて<真心を目覚めさせた>のではないかと考えられる。

両者ともに、「ライフスタイルの内容は話題にならず、ライフスタイルを乗り越えた」[3]ことは、症例報告で明白であるし、「クライアントの共同体感覚が成長して、他者に対してより有益にいきるように」^[1]なったことであろう。以上のごとく、これらの症例は、野田氏の書かれている「アドラー心理学の治療である条件」^[1]を満たしていると筆者は考えている。筆者は、冒頭に述べたようにGD#4の一種の亜系となるのではないかと考えて報告した。

なお、この症例以後は、このような<解釈投与>をいきなり与えてのセラピーを筆者は、一切行っていないことをお断りしておく。何故ならば、たまたま、キリスト教系聖職者のクライアントに遭遇したので、スピリチュアルセラピーと筆者が考えるやり方をしたままで、特殊例外症例と考えてもらってもよいと思う。

まとめ

- 1) 2人のキリスト教系聖職者に、情報収集を終わった後、一切の代替案を提示せず、いきなり「病気は神様からのプレゼント」という解釈投与を与えたセラピーを行った。この案を考え出したのは、筆者が初回のスピリチュアルセラピーに合宿参加したときの経験から、考えついたものである。
- 2) 1人は約1時間の面談で劇的に変化し、もう1人は、やや期間がかかったが、ともに、野田氏のいう、<真心をめざめさせる>体験があつたと筆者は判断している。
- 3) このやり方が成功したのは、筆者もキリスト信者であることと、クライアントが同じキリスト教系聖職者であることで、解釈投与をいきなり与えるという特殊なフレームワークが設定でき、野田氏のいう「異様な雰囲気」づくりが可能であつたためと思われる。したがって一種のスピリチュアルセラピーの亜系であると筆者は判断している。
- 4) しかし、これはあくまでも、特殊例外症例であり、一般に適用出来ないし、筆者もその後このやり方のセラピーは全くおこなっていない。

参考文献

- [1] 野田俊作：アドレリアン・セラピーとは何か。アドレリアン 20(1): 9-16, 2006.
- [2] 木村欣一郎：合宿「ヒプノドラマ」参加感想録。アドレリアン 17(3): 187-195, 2004.
- [3] 野田俊作：真心を目覚めさせる。アドレリアン 19(3): 233-243, 2006.

更新履歴

2013年5月1日 アドレリアン掲載号より転載